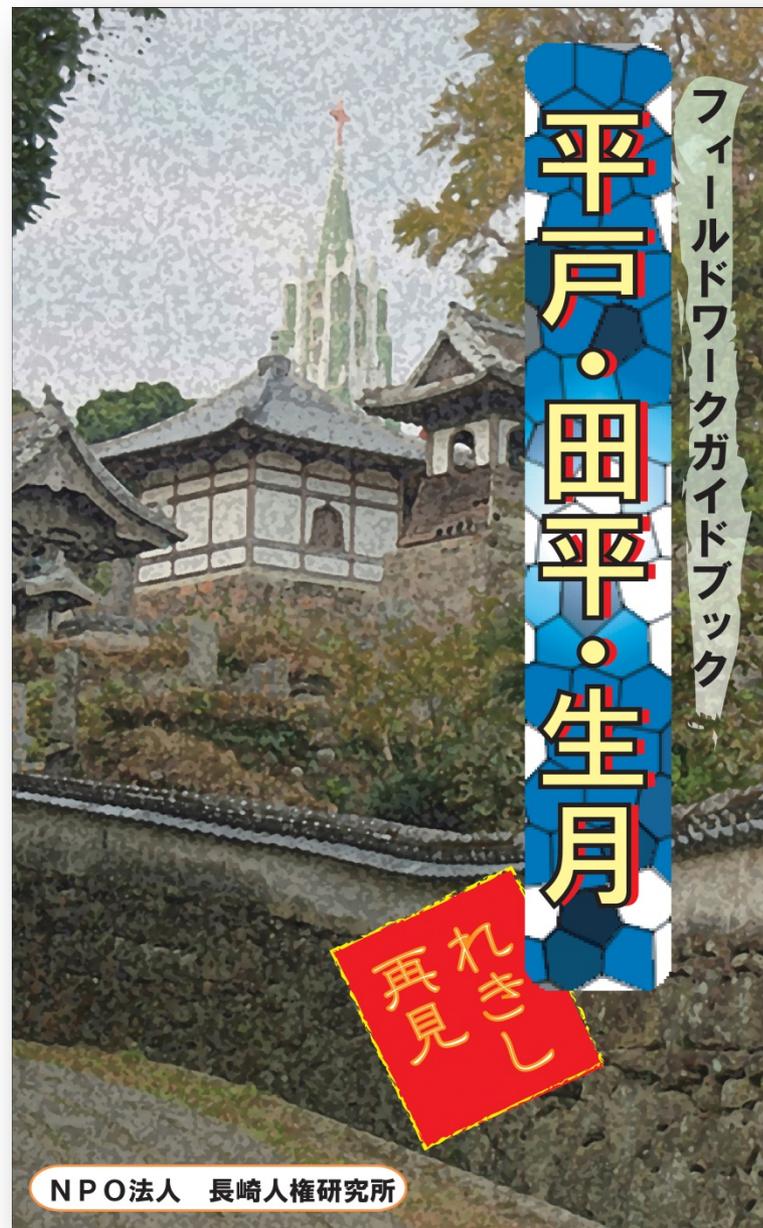


NAGASAKI
じんけん歴史散歩

平戸コース

平戸・田平・生月
れきし再見

NPO法人 長崎人権研究所



NPO法人 長崎人権研究所

平戸・田平・生月への招待

平戸市は日本の最西端にあり、日本で最初の西洋貿易港として栄えた城下町です。長崎県内で四番目の面積をもつ平戸島はタツノオトシゴのような形で、本島の海岸線総延長は185km、外洋に面した西側には半島や岬が多く、四季ごとに美しい景観が広がります。島々には、対馬暖流の影響で南方系の昆虫や植物が生息し、原生林に近い林や草原など貴重な自然がいっぱいです。また江戸時代には捕鯨が盛んで、当時の捕鯨の様子や歴史を生月町博物館「島の館」で見ることができます。

海の町・平戸の歴史は古く、昔から海を通してアジアと交流していました。26代領主松浦鎮信^{シゴの5}は、父、隆信が始めたポルトガル貿易に続いてオランダとの貿易を積極的に進め、交易発展にあわせて大規模なオランダ商館を建造。平戸(Firando)の名は世界に知られるようになりました。現在、商館の一部が復元され、大航海時代の歴史を伝えていきます。

1550年のフランシスコ・ザビエル平戸上陸に始まったカトリック信仰は、今でも13の教会をもつ平戸で息づいています。禁教時代に殉教した信徒たちの殉教聖地や、海と空の景色にとけこむ教会をめぐりながら、平戸の歴史文化に触れてみてください。

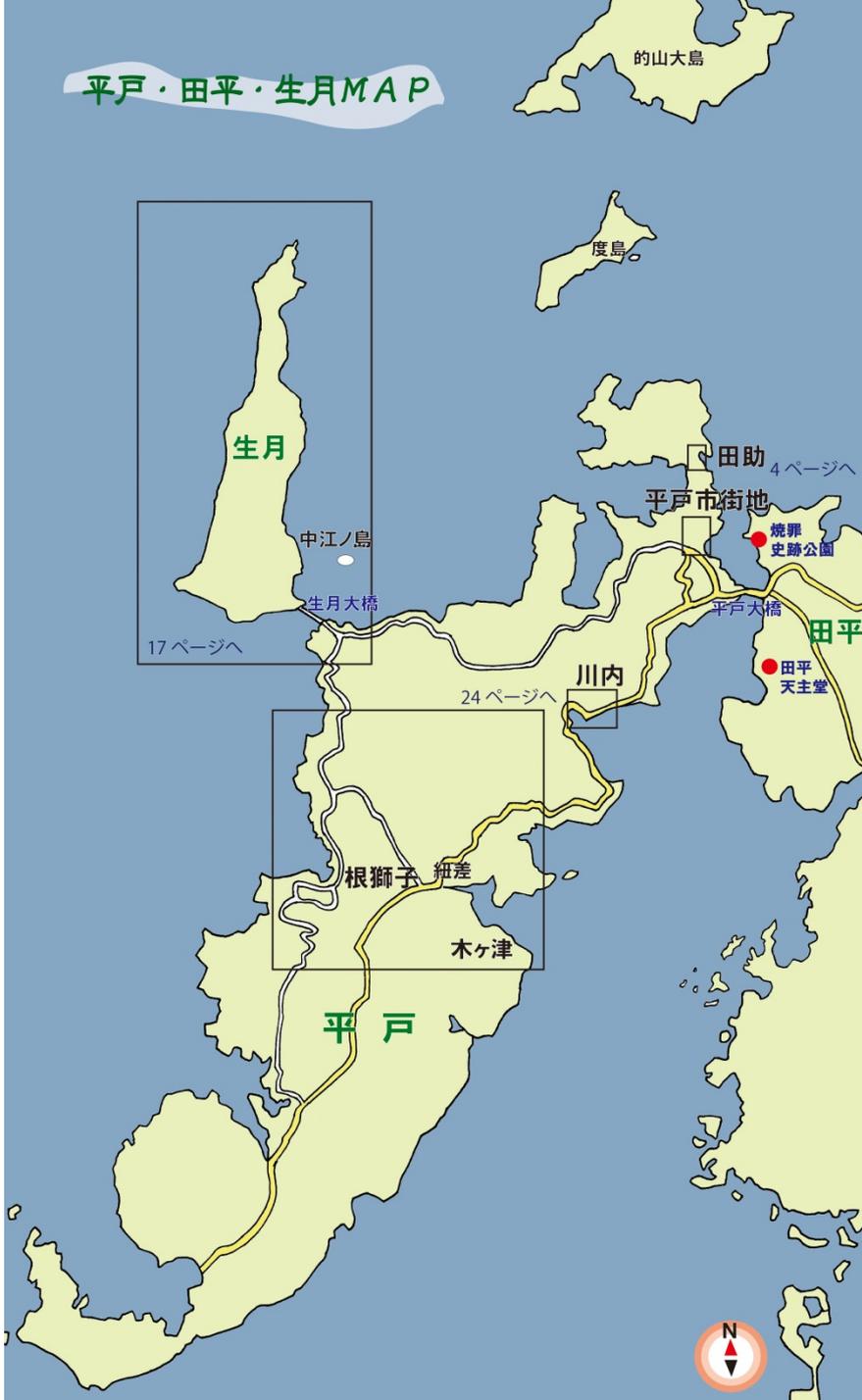
平戸・田平・生月れきし再見

もくじ

平戸・田平・生月への招待

ザビエルの平戸への道	2~3
〈平戸市街地・田助MAP〉	4
①松浦史料博物館	5
②平戸オランダ商館（復元—石造り倉庫）	6~7
③崎方公園	8~9
④寺院と教会の見える風景	10
⑤五峰王直居宅跡	11
ロレンソ了斎	12~13
⑥天桂寺	14~15
⑦焼罪史跡公園・田平天主堂	16
〈生月MAP〉	17
⑧島の館（平戸市生月町博物館）	18
⑨大バエ灯台	19
⑩山田教会・ガスパル様・だんじく様	20~21
カクレキリシタン	22~23
〈川内・根獅子MAP〉	24
⑪鄭成功居宅跡・鄭成功廟	25
⑫平戸市切支丹資料館	26
⑬紐差教会・木ヶ津教会	27
県北のある被差別部落で話されたこと	28~29
「人権のつどい」～田助・妙徳寺など～	30~31

平戸・田平・生月MAP



ザビエルの平戸への道

園田尚弘（長崎大学名誉教授）

港、城、落ち着いた街並み、コンパクトな空間にいろんなものが詰まっている平戸が好きだ。現在は静かなたづまの港町だが、16世紀中葉には全国の商人が集まり、中国、ポルトガル船が入港する国際的な港町であった。平戸や生月の旧跡にはキリシタンの殉教地が多い。隠れキリシタンに関する資料館も設けられている。平戸地方にキリスト教の種をまいたのはスペイン・バスク出身のフランシスコ・ザビエルである。東洋布教を志し、インド、モルッカ諸島で宣教し、中国で布教を計画し、上陸前に上川島^{サンチエン}で病死した。ザビエルは熱い信仰心と鋼の意志を以て、日本の各地で布教にあたっている。ザビエルは平戸滞在の間に100人の信徒を獲得、その後平戸に残ったトルレスや、ガゴ、ヴィレラなどの宣教師は熱心な布教活動によって、信者の数を増やしている。

熱烈な布教者であったザビエルは、ポルトガル国王の富国政策のためにも働いている。交易によってポルトガルが莫大な利益を上げることによって、国王がキリスト教広布の後ろ盾になることを、ザビエルは十分に計算に入れている。そのため貿易の推進、交易路の拡大にも協力した。鹿児島で書かれた書簡では、日本の他の地方より金や銀が集まる堺に商館を設けることを提案している。またザビエルはどのような商品を持ってきたら日本で利益を上げることができるかを調べている。その日本向けの品物のリストは紛失しているので、詳細は分からない。（あえて推理すれば、生糸、絹織物、綿布などの織物、銅銭、皮、さらに胡椒や、丁子などの香料、染料・薬として用いられた蘇木などであろうか。）

ザビエルは三度平戸に来ているが、1550年初めて平戸に来たのは、当時入港していたポルトガル船がゴアやマラッカからの手紙を運んできたのではないかと考えたからであった。二度目、三度目は京都への旅の行き帰りに立ち寄った。

それではポルトガル船はなぜ、西九州の小島にすぎない平戸島に入港していたのだろうか。それは当時平戸が東南アジア、中国、日本を結ぶ港市のネットワークの拠点の一つであったからである。特に中国の寧波、舟山^{チヨウサン}群島と博多を結ぶ線上に位置したことが大きかった。海外との交易に熱心であった平戸領主松浦氏は、1641年中国人の倭寇の頭目として知られ、東アジアの海域ににらみをきかせていた王直を平戸に迎え、この人物の力で平戸に中国船の出入りを盛んにさせた。王直は硝石、生糸を中国や東南アジアで買い付け日本に運び利益を上げた。

また日本のあるいは日本商人の密輸を手助けして利ザヤを稼いだりもしただろう。ポルトガルの船も王直の誘導によって平戸に入港するようになったといわれる。中国船は海賊にも変じたから、中国との密貿易で利益を上げていたポルトガル商人も、王直の支配が及ぶ安全な交易ルートを使って平戸に何度も入港した。

王直は1559年には中国で処刑されている。その活動の時期は、ザビエルの東アジアでの布教活動の時期ともしばらく重なっている。ポルトガル商人たちの活動は、マカオを拠点として獲得してからは、独自のルートを切り開いて精力的に進んでいくのだが、ザビエルのような宣教師がポルトガルの商人と協力して貿易活動を盛んにしたといっている。

しかしザビエルにとって、商業活動は布教を進めるうえでの手段であった。巨大な利益を収めながら、キリスト教布教には吝嗇なポルトガル国王に対しても、彼は歯に衣着せずその態度を戒めている。彼はあくまでも十字架を高く掲げ、飢えにも寒さにも負けず、盗賊も恐れぬ信仰者、宣教師であった。

歴史の道

2000年から2001年にかけて日蘭交流400周年記念事業が行われ、平戸港交流広場から松浦史料博物館へ通じる沿道に歴史人物のブロンズ像が設置された。この通りは「歴史の道」と名付けられ、交流広場側から、初代平戸イギリス商館長のリチャード・コックス、初代平戸オランダ商館長のジャック・ス・スペックス、デ・リーフデ号の航海長ウィリアム・アダムズ、宣教師フランシスコ・ザビエル、ポルトガル船を平戸に導いた中国貿易商の王直、松浦家第25代領主の松浦隆信の順に並んでいる。



写真左：歴史の道（像は、手前からザビエル、王直、松浦隆信）
写真右：聖フランシスコ・ザビエル記念教会のザビエル記念像



1 松浦史料博物館



左:平戸城天守閣から撮った松浦史料博物館全景



右:松浦史料博物館への登り口

平戸市鏡川町12番地 (0950-22-2236) <http://www.matsura.or.jp/>

博物館は、1893年(明治26)に建てられた松浦家の私邸(県指定有形文化財)で、当家より寄贈された資料をもとに1955年(昭和30)設立された。館内には、異国船絵巻や秀吉の伴天連追放令、武具や絵画など12,500点が展示されている。松浦(まつら)党の時代、ポルトガルとの貿易、キリスト教の布教、オランダ貿易、江戸時代後期の当主松浦静山のコレクション等、平戸藩にとどまらず、日本の歴史を見渡せる展示が行われている。(入館料:500円 年末年始のみ休館)

バテレン追放令 (まつら 松浦文書)

一、日本は神国たる処、きりしたん国より邪法授け候儀、太(はなはだ)以て然るべからず候事

(二、三条略)

一、黒船の儀は商売の事に候間、各別に候の条、年月を経、諸事売買いたすべき事。

(五条略) 天正十五(一五八七)年六月十九日

(『詳説日本史B』山川出版社より)

2 平戸オランダ商館(復元一石造り倉庫)

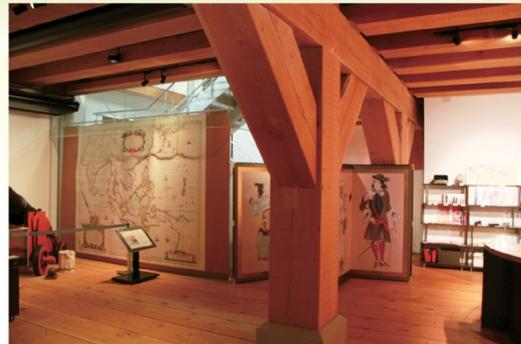


平戸市大久保町2477番地 (0950-26-0638) <http://hirado-shoukan.jp/>
写真:復元されたオランダ商館

1550年(天文19)のポルトガル船平戸入港を期に、平戸にはポルトガル船が毎年入港し、1561年(永禄4)には5隻を数え、貿易の最盛期を迎えた。しかし、同年ポルトガル人船長を含む14名の死傷者を出す宮ノ前事件が勃発、翌1562年(永禄5)ポルトガルは貿易港を大村領横瀬浦に移した。ポルトガルはその後長崎を貿易拠点とし、平戸に來航することはなかった。

1609年(慶長14)オランダ船ローデ・レーウ号、クリフーン号が平戸に入港した。平戸和蘭商館が設立され、1612年(慶長17)には住宅や倉庫が建造され、商館は軌道に乗った。

オランダ貿易では、生糸・木綿・砂糖などが輸入され、金・銀・漆器・陶器等が輸出された。「平戸オランダ商館日記」によると、1627年(寛永4)から1640年(寛永17)までに91隻のオランダ船が平戸に入港している。しかし、商館は1641年長崎に移された。



オランダ商館の内部

また、イギリスは1613年(慶長18)クローブ号を平戸に入港させた。直ちに商館が開設され、1621年(元和7)には、商館、住宅、倉庫などが建設された。しかし、1623年バタビヤの東インド会社で、平戸英国商館の解散が決定され、その役割を終えた。

『平戸オランダ商館の日記』には、「かわや」を称する商人がいる。カワヤシンクロウは細川家の代理人として活躍するが、カワヤジュエモンは、商館日記に「我々の信頼できる人」と紹介されている。彼らの貿易取引品の中には、「シャム産鹿皮」(75,090枚)や鮫皮(43,378枚)、また牛皮(20,990枚)など、大量の皮革類が含まれていることがわかる。

なお、館内には、絵図や「ジャガタラ文」、リーフデ号の模型なども展示されている。(入場料 大人300円)



オランダ商館倉庫跡(川内)

平戸島の東側中央部に位置する川内港は、17世紀初頭のイギリスやオランダなどとの海外貿易時代、平戸港の副港として栄え、多くの外国船が帆を休めた。建物については明らかではないが、番人小屋や倉庫、貯木場があったとされる。

参考:『紅毛文化と平戸I』(平戸市文化協会)、『被差別民の長崎:学』(NPO法人長崎人権研究所)

3 崎方公園



平戸市大久保町 写真:三浦按針之墓(左)と三浦按針夫婦塚(右)

平戸市崎方町裏の高台一帯にある。広場からは、港の対岸に平戸城社が望め、平戸港や市街の町並みも一望できる。園内には、フランシスコ・ザビエル記念碑、三浦按針墓地などの史跡がある。

三浦按針(ウィリアム・アダムズ)



歴史の道にあるウィリアム・アダムズ(三浦按針)像

イングランド南東部のケント州ジリングラムに生まれる。英国海軍に入り、海戦にも参加した。極東を目指すオランダ船隊の航海士に志願した。航海は困難を極め、出港した5隻の船団のうち、リーフデ号だけが1600年(慶長5)豊後に漂着した。

新教国オランダ、イギリスと対立するイエズス会宣教師は、船員を即刻処刑するよう要求したが、アダムズらを引見した家康は、航海の目的やポルトガル・スペインら旧教国との

紛争を臆せず説明する態度を気に入り、米や俸給を与えて慰留し、外国使節との対面や外交交渉で通訳を任せ、助言を求めた。幾何学や数学、航海術も教えた。また、家康の命で西洋式帆船を建造した功績で、250石取りの旗本に取り立てられ、三浦半島に領地を与えられた。「三浦」の姓は領地に、「按針」は水先案内人に由来する。

1616年(元和2)に家康が亡くなると、幕府の方針は鎖国体制に向かったため、按針の立場は不遇となった。幕府に警戒されながら、1620年(元和6)に平戸で没した。57歳であった。

平戸市木引田町に終焉の地があり、毎年5月下旬に墓前で「按針忌」が催される。

フランシスコ・デ・ザビエル



ザビエル記念碑

1506年、スペインのナバラ地方の貴族の末子として生まれる。19歳でパリ大学に留学。ここでイグナチオ・デ・ロヨラの強い影響を受けて聖職者を志し、1537年に司祭に叙階された。

イエズス会員として、1542年にゴアに赴き、インド各地やマラッカやモルッカで布教した。

マラッカで1547年に出逢ったのが鹿児島出身のヤジロウ(アンジロー)である。

1549年(天文18)、ヤジロウらの案内で坊津に上陸。鹿児島で島津貴久に謁見したが、貴久が禁教に傾いたため、薩摩を去った。その後、平戸、山口をへて、1551年(天文20)に京に到着し、布教許可を求めて後奈良天皇や足利義輝への拜謁を望んだが、成功しなかった。また、比叡山延暦寺の僧侶との論戦も拒まれた。

京を去ったザビエルは、山口で大内義隆の布教許可を得て、2カ月間の布教で約500人の信者を獲得した。この中には盲目の琵琶法師ロレンソ了齋がいた。豊後では大友義鎮(宗麟)に迎えられ、その保護下で布教を行った。

日本滞在が2年を過ぎ、一旦ゴアに戻ったザビエルは、日本布教には中国での布教が不可欠として、中国を目指すのが、1552年、46歳でこの世を去った。

平戸市鏡川町のカトリック平戸教会(通称、聖フランシスコ・ザビエル記念教会)にも、記念像が建てられている。

4 寺院と教会の見える風景



平戸市鏡川町

瑞雲禅寺・光明寺・正宗禅寺の3つの寺院に重なるように、聖フランシスコ・ザビエル記念教会の屋根と十字架が望める場所がある。

瑞雲禅寺は1402年（応永9）の創立、曹洞宗の寺。鎖国により、母と平戸に想いを馳せながら国外に追放された、オランダ商館長の娘コルネリアの供養塔がある。1679年（延宝7）、両親の菩提を弔いたいという彼女の願いによって、西久保法華宗本成寺の境内に五輪の塔を建てたが、現在は瑞雲禅寺境内に移されている。



コルネリアの塔

瑞雲禅寺、光明寺を経て石畳の道を登ると、丘の上に大塔・小塔がそびえるゴシック様式の聖フランシスコ・ザビエル記念教会が建っている。1931年（昭和6）4月、新聖堂の落成・献堂とともに早坂久之助司教によって設立された。1971年（昭和46）にフランシスコ・ザビエルの三度の平戸訪問を記念して聖堂前側面に記念像が建立されたことにより、聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂とも呼ばれる。敷地内には、平戸殉教者顕彰慰霊の碑も建立されている。

5 五峰王直居宅跡



五峰王直居宅跡の碑 平戸市鏡川町

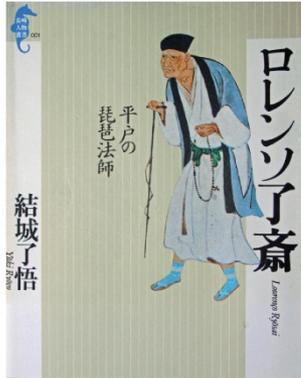


歴史の道にある王直の像

木引田町のメインストリートから横道に入り、少し階段を上がると、王直の居宅跡がある。王直（？-1559年）は中国安徽省の出身で、倭寇の頭目となった人物。五峰とも呼ばれた。ポルトガル船が初めて種子島に来た際に船に乗り合わせていたといわれる。明の海禁政策をかいくぐって、舟山群島の双嶼港^{リヤンポー}、烈港での密貿易で巨利を得る。これら中国での拠点が明軍によって破壊されると、王直は五島、平戸に本拠を移した。平戸では港を見晴らす地点に居を構え、唐様の邸宅を建てた。平戸港に中国船やポルトガル船を導き入れ、平戸に「西の都」と呼ばれる隆盛をもたらした。配下の者は三千人に達していたという。明の官吏の策略にはまった王直は1559年処刑された。

王直の人物評価については日本と中国の間では違いがみられる。安徽省に日本人が建てた「王直祖墓」からは、王直を中国への反逆者として、その名前が削られるという事件も起こっている。

ロレンソ了齋



『ロレンソ了齋 平戸の琵琶法師』
(結城了悟著、長崎文献社)

長崎に入港するポルトガル船を描いた神戸市立博物館蔵の「南蛮屏風」に、出迎えの人々に混じって、一人の老人が描かれている。深いしわ、曲がった腰、杖を手に立つこの老人こそ、日本でのキリスト教布教に大きな役割を果たしたロレンソ了齋その人である。

ロレンソは、1526年(大永6)に肥前白石(平戸島)に生まれた。「片眼は全く見えず、もう一方はほんの僅かしか見えない一人の盲人がいた。日本

で一般のならわしどおり、彼は琵琶を手に、貴人の家々で弾いては歌い、洒落や機智を操ってはその場の興をそえ、また昔物語を吟唱して、糊口の計をたてていた」という。彼は、1551年(天文20)に山口でフランシスコ・ザビエルの説教を聞き、洗礼を授かった。

彼は、イエズス会の宣教師たちを助け、キリスト教の布教活動に従事した。1559年(永禄2)に、京に入り、苦勞の末に將軍足利義輝に謁見し、布教許可の制札を受けた。また、当時の京都の実質的な支配者だった三好長慶からも布教許可を得た。

1563年(永禄6)に修道士(いるまん)となったロレンソは、比叡山にも赴く。それは「比叡の山の允許^{いんきよ}と承認なしに、みやこの町で、日本で流布している古い諸宗派以外の宗教を説くことは、いかなる場合にもできなかった」からである。そして、貧しく、みすぼらしいロレンソは比叡山の高僧と対面することに成功した。「いるまんは能弁であり、このような仕事にかけては老練であったので、遂に心海のところに行くことに成功し、直ちにデウスのことについてきわめて巧妙に準備された話をし、少なからぬ熱意をもって、そのために自分が遣わされた仕事を首尾よくなし遂げた。」

1569年(永禄12)には、信長の面前で反キリシタンの論客であった日蓮宗僧侶日乗と論争して論破した。人々は「ほとんど盲目無教養であり、何等かの学問をしたわけでもなく、読み書きもできないいるまんロレンソが、元来学者の係うこれらの問題で、どうしてこれほど明瞭にきっぱりと答えることができるのかという、ある疑念を抑える気になれなかった。」この他にも、琵琶法師として日本の伝統文化や仏教・神道の知識が深かったロレンソは、その知識を生かして「幾度の甚だ学問のある僧侶たちと討論したが、デウスの御好意によって、これらの討論のどれ一つにも一度も負けたことはなかった。」

キリスト教を畿内と九州をまたにかけて精力的に布教した。キリスト教の言葉を洗練された日本語に翻訳して人々に伝えた。「彼は人並みすぐれた知識と才能とすぐれた記憶力を持っていた。彼は絶大な感激と熱意をもって説教し、実に豊富な言葉を意のままに駆使し、その点では彼(の説教)を聴く者皆を驚かせたほどの優雅さ、明快さ、選りすぐりを示し」、名説教家として戦乱の世にあって、救いを求め、神の教えを知ろうとした多くの人々に答えた。当時の畿内や九州で多くの洗礼者が出たことはロレンソの布教活動に負うところが大きく、その存在は、もっと多くの人々に知られてよい。

しかし、1587年(天正15)、豊臣秀吉によるバテレン追放令を受けて九州へと移り、1592年(文禄元)に長崎で死去した。

引用：ルイス・フロイス「日本史」



白石から生月を望む



天桂寺、右下にあるのが山頭火の句碑

平戸市大久保町

平戸島の北部、田助港の近くに、臨済宗妙心寺派の禅寺である天桂寺がある。その境内には、1932年（昭和7）3月にこの地を訪れた俳人種田山頭火が、「肉弾（爆弾）三勇士」の一人である田助出身の作江伊之助を悼んで詠んだ「弔旗へんぼんとしてうらゝか」の句碑がある。

山頭火の『行乞記』によると、同年3月4日に「三勇士」が出てくる。「爆弾三勇士には涙が出た」と書き、「戦争一死一自然、私は戦争の原因よりも先づその悲惨にうたれる」と続けている。

また、3月31日の当時の平戸町での『行乞記』には、「当地は爆弾三勇士の一人、作江伍長の出生地である、昨日本葬がはなばなく執行されたといふ」とあり、翌日の4月1日には、「平戸町内ではあるが、一里ばかり離れて田助浦といふ、もつとうつくしい短汀曲浦がある、そこに作江工兵伍長の生家があつた、人にあまり知られないやうに回向して、「弔旗へんぼんとしてうらゝか」という句を詠んでいる。

田助にあるバス停「浦方」から急な階段を上った田助浦を見渡す丘の上に、作江伊之助の顕彰碑「忠烈作江伊之助君之碑」があり、平戸市岩の上町の亀岡神社の境内には「作江伊之助慰霊碑」と「平戸肉弾二勇士碑」がある。



田助にある「忠烈作江伊之助君之碑」

「二勇士」とは作江伊之助と北川^{すずむ}丞のことである。北川丞は北松浦郡佐々町出身であり、佐々町にある三柱神社の境内には、忠魂碑と東京・芝の青松寺から移築された銅像がある。

また、「肉弾三勇士北川伍長記念館」が生家に隣接しており、遺品や写真をはじめ賞状、感謝状、葬儀の際の久留米工兵第十八大隊長の弔辞などが展示されている。

参考：『定本山頭火全集』（春陽堂、全7巻）



亀岡神社にある「作江伊之助慰霊碑」

「肉弾（爆弾）三勇士」とは



亀岡神社にある「平戸肉弾二勇士碑」



佐々町の三柱神社にある北川丞の銅像

第一次上海事変中の1932年（昭和7）2月22日、中国上海付近の廟巷鎮^{ひょうこうちん}の戦闘で、久留米工兵第十八大隊の一等兵として、敵の鉄条網を爆破するための破壊班に選ばれた作江、北川、江下武二（佐賀出身）の三人が、点火した破壊筒をかかえて飛び出したが、北川の負傷のため帰還することができず鉄条網諸共炸裂して、突撃路を切り開き、敵の陣地を占領したとされる。

三勇士の記事は、2月24日に一斉に各紙に掲載された。「これぞ真の肉弾！ 壮烈無比の爆死、志願して爆弾を身につけ鉄条網を破壊した三勇士」（大阪朝日）、「世界比ありやこの気魄、点火爆弾を抱き鉄条網を爆破す、廟行鎮攻撃の三勇士」（東京日日）、「肉弾で鉄条網を撃破す、点火した爆弾を身につけ、躍進した三人の一等兵、忠烈まさに粉骨破身」（大阪毎日）。新聞等の報道で「軍神肉弾三勇士」ともてはやされ、軍部上層の特攻思想へと進み、終戦間近に多くの若者を死の戦場へと向かわせることになる。

7 やいざ 焼罪史跡公園・田平天主堂



焼罪史跡公園



「殉教の碑」

焼罪史跡公園 (平戸市田平町野田免)

松浦鉄道「たびら平戸口駅」から、海岸沿いに車で5分のところにある田平焼罪史跡公園。平戸瀬戸のうず潮と平戸港を見渡すことができる絶景の地にある。ここからは瀬戸をはさんで、対岸に平戸城と平戸ザビエル記念教会堂が見える。1622年(元和8)、キリスト教禁教令の中、布教活動・救済事業を行ったイタリア人宣教師カミロ・コンスタンツォ神父が火刑に処せられた。カミロ神父は禁教令でマカオへ追放され、1621年(元和7)に日本に再潜入。佐賀の不動山や唐津で活動し、翌年、平戸領内で捕えられ、田平で殉教したのである。

田平天主堂 (平戸市田平町小手田免)

田平天主堂は、平戸市田平町小手田免にあるカトリック教会の聖堂である。正式にはカトリック田平教会、所在地にちなんで瀬戸山天主堂とも呼ばれる。明治時代に、フランス人宣教師ド・ロ神父などの勧めにより、黒島(佐世保市)や海外地区(西彼杵半島)等から移住してきた数家族の信徒たちが開墾した瀬戸山の地に、1918年(大正7)、教会堂を得意とした棟梁鉄川与助の設計及び施工により建立された。鉄川与助の煉瓦造り教会堂作品の中では最後の作品。2003年(平成15)に重要文化財となる。2007年1月23日、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の一つとして世界遺産暫定リストへの追加が決定した。

松浦鉄道西田平駅から車で約5分、またはたびら平戸口駅から車で約10分。



8 島の館(平戸市生月町博物館)



平戸市生月町南免4289番地1 (0950-53-3000)
<http://www.ikitsuki.com/yakata/>



生月大橋を渡ってすぐのところに「島の館」はある。館内は【勇魚とり(捕鯨)の物語】【島の暮らし】【カクレキリシタン】の三コーナーに分けられ展示が行われている。

【勇魚とり(捕鯨)の物語】

では、実際の鯨の骨が空中に吊り下げられ、江戸時代の捕鯨の様子を大型ジオラマで再現し生き生きと伝えている。江戸時代生月の益富組は2万頭を捕獲し、その収益は3百万両に上り、最盛期には3千人が働いていたとされる。



【カクレキリシタン】のコーナーでは、かくれキリシタンの御神体である「納戸神様」を祭る部屋が再現され、信仰の様子を映像で見ることが出来る。また、信仰に用いた祭具類も数多く展示されている。

(入館料：500円)

9 大バエ灯台



平戸市生月町御崎

生月島の最北端部は高さ100mの断崖になっており、大湊鼻断崖という。その断崖の上に白亜の灯台が建っている。灯台には展望台が併設され、杓岐、宇久、上五島などの島々、視界のよい秋冬には遠く対馬を望むことができる。

この灯台は、戦争中に御崎砲台の弾薬庫として作られたコンクリート製の倉庫の上に建っており、灯台の横に回ると、今でも当時の倉庫の入り口を見ることができる。

平戸には、「対馬要塞」とともに対馬海峡の防備のため、旧日本陸軍により設置された「杓岐要塞」の一角をなす砲台があった。御崎砲台の15cm砲と^{あづ}的山大島砲台(平戸市大島村の山戸田)の30cm砲は、杓岐島の黒崎砲台の41cm砲とともに、杓岐水道等に来襲した敵の軍艦を迎え撃つこととなっていた。

御崎砲台跡:御崎砲台は、1937年(昭和12)に着工、1938年(昭和13)に竣工となり、15cm砲が二門配置された。現在も見張所跡や倉庫跡は残っているが、経年により埋没しているものもある。

的山大島砲台跡:的山大島砲台は、1922年(大正11)に調印されたワシントン海軍軍縮条約により、廃艦となった戦艦「鹿島」の30cm口径の主砲塔を陸上用の砲塔砲台に改造して設置され、1924年(大正13)に着工、1929年(昭和4)に竣工。現在もコンクリート製の塀や建物跡は残っているが、周辺には人が立ち寄ることはあまりなく、草木が生い茂っている。

参考：『長崎県の戦争遺跡と戦没者慰霊碑』（長崎県福祉保健部原爆被害者援護課）

10 山田教会・ガスパル様・だんじく様



中江ノ島を見下ろす黒瀬の丘にある「黒瀬の辻殉教碑」

山田教会 (平戸市生月町山田免)

平戸市の生月島にあるカトリック教会である。生月島は多くの殉教の歴史を持ち、島民のほとんどが隠れキリシタンだったと言われる。1865年(慶応元)の浦上での「信徒発見」後も容易にカトリックに復帰しなかったが、働きかけによって少しずつカトリックに復帰する信者が増えていった。生月島では最初は寺部に教会が建てられ、この山田でも1909年(明治42)に教会建設に着手、1912年(大正元)に完成、献堂された。その後1970年(昭和45)に改築・一部増築が行われた。多くの教会建築を手がけた鉄川与助によるロマネスク様式の教会堂である。

教会の前庭には、生月島出身の聖人・トマス西の列聖記念碑が建てられている。

※トマス西神父

1590年(天正18)、生月島に生まれる。父の西玄可(ガスパル)は、妻、長男と共に殉教した。マニラに渡り、1626年(寛文3)には日本人として初のドミニコ会司祭に叙階された。



山田教会

1629年(寛文6)に布教のために密かに潜入するが逮捕され、1634年(寛文11)に西坂で殉教した。

1987年(昭和62)西玄可(ガスパル)とともに聖人に列せられた。

ガスパル様 (クルスの丘公園/黒瀬の辻殉教地 平戸市生月町山田免)



ガスパル西玄可が殉教した場所

大きな十字架の立つこの丘は、「黒瀬の辻の十字架」とも呼ばれ、生月のキリシタンにとっては信仰の原点とも言える聖地である。この十字架は、1558年(永禄元)、生月にキリスト教の布教を行ったガスパル・ヴィレラ神父が建てたのを最初とする。

また、キリスト教の迫害が始まる中で、キリシタンであった領主籠手田、一部氏が領民とともに長崎に脱出した後、残された人々を指導した西玄可(ガスパル)が、1609年(慶長14)に家族とともに殉教した場所でもある。西玄可は生月で最初の殉教者となったが、禁教によって失われた十字架があったこの地での殉教を望んだと言われる。

ここから見える中江ノ島も、多くの人が殉教した場所であり、現在もカクレキリシタンの聖地となっている。

だんじく様 (平戸市生月町南免)



車道から、険しい山道を海岸まで下ると、暖竹の群落の中に祠がある。この祠は、殉教した三人家族を祀ったものとされる。伝承によれば、弥一兵衛とその妻マリア・子のジュワンは弾圧の激しかった生月を逃れ

五島に渡ろうとして生月島南西部の断崖の下のダンジク(暖竹)の藪に身を潜めた。しかし息子のジュワンが海岸に出て遊んでいる所を海上から役人に発見され一家全員斬首された。そのため船で詣でるのは禁忌とされる。三人家族が描かれたダンジク様の掛け絵もあり、現在も1月16日に行われる「ダンジク講」では、掛け絵を掲げて、祈りを捧げている。この掛け絵は、布教時代の聖家族の説話が、禁教時代になって地元殉教者の伝説に結びついて変容したと考えられる。

カクレキリシタン



「黒瀬の辻殉教碑」のレリーフ

隠れキリシタンとは、江戸幕府の禁教令後、強制改宗で棄教して仏教に偽装信仰したキリスト教信者（「潜伏キリシタン」）と、1873年（明治6）に禁教令が解かれて潜伏の必要がなくなっても、江戸時代の秘教形態を守り、カトリック教会に戻らない信仰者（「カクレキリシタン」）の両者を特に区別せず指す俗称である。

禁教の時代に潜伏した信徒達は、表向きは仏教徒として、集落単位に秘密組織を作ってひそかに「オラショ」を唱え、また、慈母観音像を聖母マリアに見立てたり、聖像聖画やメダイ、ロザリオなどの聖具を「納戸神」として祀り、信仰を守った。長崎県や熊本県の一部では、信者が多かったこともあって、多くの信仰組織が存続した。

生月島と平戸島西部にキリスト教が広まるきっかけは、1550年（天文19）にフランシスコ・ザビエルが平戸に布教を開始したことである。早くも1553年（天文22）には、生月島の領主籠手田安教・一部勘解由が入信するが、これはポルトガル船の入港を求める平戸領主松浦隆信の名代であったといわれる。そして、1558年（永禄元）には、籠手田安教が、領民の一斉改宗をおこない、1565年（永禄8）には、一部領でも一斉改宗がおこなわれる。こうしてキリシタン信仰が領民に広まるが、その範囲は平戸城下と籠手田安教・一部勘解由領の生月島と平戸島の一部に限定された。

1599年（慶長4）、キリシタンに反感を持つ松浦鎮信しげのぶが平戸領主になると、領内の状況が一変し、籠手田、一部氏は、領民600名を率いて平戸を脱出して長崎に移った。その後、松浦鎮信は、教会や十字架を破却し寺社を再興するなど、禁教政策を進めた。

残った信者の指導に当たったのは西玄可（ガスパル）であるが、彼はもともと宣教師不在の時など、教会行事や洗礼など重要な儀式も執行していた。1609年（慶長14）の殉教にあたっては、キリシタン式の葬儀が黙認されている。その後、元和・寛永の殉教をへて、一般信徒にも弾圧が及ぶようになると、信仰は潜伏を余儀なくされる。

禁教時代に信仰継承の母体となる「垣内」や「津元」と呼ばれる組織は、信仰が盛んであった時代に集落ごとに組織された慈悲の組（ミゼリコルディア）や御札を奉じる小組（コンパイヤ）、信心会（コンフラリア）が組み合わされて成立し、教義に通じたリーダーが親父役や御爺役などになった。布教の時代にも宣教師不在の時は、教会行事や洗礼なども信者が当たったため、禁教が本格化して宣教師が存在しなくても、不自由なく運営されたのではないか。殉教者は、信仰を守った犠牲者として尊敬され、やがて信仰の対象として強く崇められるようになった。

1873年（明治6）に「禁教令」が解かれても、かつての教義理解が失われ、仏教や神道、民俗信仰とも結びつく独自の信仰形態となっていたため、カトリックに復帰せず、先祖以来の信仰を継承する人たちも存在する。これを「カクレキリシタン」とよんでいる。

生月島や平戸島のカクレキリシタン信仰は、16世紀の信仰形態に起源を発し、変容しながら継承されてきた聖具を御神体として、精神的には禁教時代の地元殉教者（その聖地）への尊崇を中心とした信仰である。

参考：『生月島のかくれキリシタン』（平戸市生月町博物館・島の館）



生月カクレキリシタンの聖地中江ノ島



11 鄭成功居宅跡・鄭成功廟



円山公園内にある鄭成功廟 平戸市川内町

平戸で鄭成功（1624年-1662年）ゆかりの場所を訪れると、中国文化の雰囲気が漂っている。廟内の中国服を着た座像の顔は端麗で、居宅跡に祀られている媽祖像は東アジアの海のネットワークを示している。

鄭成功は、日本、台湾、中国海域で勢力を誇った鄭芝龍と平戸の田川マツとのあいだに生まれた。川内の浜には誕生にまつわるエピソードにちなんだ児誕生石がある。七歳まで平戸に過ごした鄭成功は幼名を福松と称した。旧宅跡には和服を着た母子像が立てられている。父の招きで中国に渡った鄭成功は、官吏たるべく勉学に励んだ。明皇帝より国の姓「朱」を授かった。台頭する清に帰順した父と違って、明の再興をはかるが、清の勢力に追われ、台湾に逃れる。台湾のオランダ人を追放し、台湾を統治。清に対抗しようとしたが、1662年若くして病死した。

近松門左衛門の「国姓爺合戦」の主人公のモデルであるが、話の内容の多くは史実ではない。



鄭成功母子像



鄭成功児誕生石

12 平戸市切支丹資料館



ねしこ
平戸市大石脇町1502番地1（根獅子ヶ浜脇）（0950-28-0176）

根獅子の浜海水浴場を少し山治いに入ると、切支丹資料館がある。ここは生月とともに隠れキリシタンの信仰が伝えられている。館内には、祭具やマリア観音、禁教令の高札、踏絵などが展示されており、1550年（天文19）のキリスト教伝来から布教時代、弾圧時代、潜伏時代、隠れキリシタンの時代が編年的に解説されている。また、御神体の納戸神である聖画・聖像、お水（聖水）、おまぶり（十字型の紙片）、たもと（ロザリオ）、サンジアン（メダリオン）などが展示されている。

この資料館の脇には、「おろくにん様」というキリシタンであるがゆえに処刑された6人が埋葬されたとされる「うしわきの森」がある。また1635年（寛永12）、70余名のキリシタンが根獅子の浜で処刑されたことから、この地は聖地とされている。

（入館料：200円 休館日：水曜日）



資料館内部の展示



うしわきの森

13 紐差教会・木ヶ津教会



平戸市紐差町

平戸島の中央部、紐差町にロマネスク様式の紐差教会がある。紐差は明治になって以降、平戸のキリスト教の中心地であった。1874年（明治7）に住民の多くがカトリックに改宗、外海からも移住してきた。

紐差教会は、1887年（明治20）第2代主任マタラ神父によって設計、3代目主任ボア神父、4代目主任萩原神父に引き継がれ完成した。施工は鉄川与助で、本格的なセメント造りの教会である。大規模な天主堂で、旧浦上天主堂が原爆によって倒壊し新たに建てられるまでの間、日本最大の天主堂と言われた。

木ヶ津教会（平戸市木ヶ津町）



紐差教会より県道60号を少し南下、木ヶ津町の漁港を過ぎた山間部に木造の小さな巡回教会がある。聖堂内の壁に掲げられた14枚の絵画「十字架の道行」

（死刑の宣告から墓に葬られるまでの各場面を描いたもの）は、永井隆が亡くなる数カ月前に病床で描いたもので、永井の死後、長崎の浦上教会に寄進されていたものを木ヶ津教会が譲り受けたものである。



県北のある被差別部落で話されたこと

この記録は、1981年県北のある被差別部落でIさんという一人の女性にお話ししていただいたものです。江戸時代から、明治、そして敗戦の時までのIさんの住む部落の様子が生き生きと語られています。(あ)

〈 薬 〉

今生きておれば120歳ぐらいになるおばあちゃんの話ではな、ここの下の〇〇さんは、あんまり大きな家ではなかったが、太鼓が主で職人さんが働いておった。

私の方は、皮の仕事はしとらんですから。家の薬がな、戦争がじゃましてくれて、材料の配給ができんごとになってしまった。それで、原料が入るまで牛を養のうて畑どもいじくりよったんです。そしたら、終戦になってアメちゃんが入ってくる、たちまち規則が改正になって、昔の家伝薬方ではできんごとになった、薬事法で。

家の裏に製造場をもとったです。膏薬製造するだけのところは小さかけど。あそこに杉林があるでしょう。あそこまで本家の大きな家があったそうです。

〈 ご維新 〉

ご維新のとき動いたとでしょうな。商売も返還してしもうとる。

そうじゃいな、本当私が一人、誰も聞いとった人はおらんと。この村ではな、さかんな時代は、剣道の先生を雇いこみ、書道の先生も雇いこみ、お花は池坊で、そがん盛んなもんでした。それがご維新になってから、ごろっと変わってしもうてですたい。

うん、教育熱心であらした。また、捕り物のとき、ちょうどドラマである捕物帳のごったつと。急用なとき、召集されとつとな、それで武芸も必要になって、ここの〇助おじい、主人の父親たい。商売の売薬でシモにいて、その腕を見た人のあるとらしか。「〇〇さん、あなたは家伝の

薬ばかりでなく、奥義を究めとるでしょう」と言われたつて。女は薙刀、男は棒使いじゃつたと。捕物のときの十手ですな、あれが赤付けでしたよ。私の方の先祖は、一間四面の堂の中に入って、一間棒を操りよつたというですもんな、壁に当たらんごと。

〈 カンダラ 〉

いえ、ここは絶対殺生のお手伝いはせん。しかし鯨の捕れたときだけは、5銭でしたか働ける人も働けない人もお祝いのつもりで多分くれたんです。泥棒とはおかしかけん「カンダラ」といいよつた。昭和14・5年ごろじゃなかつたらうか、鯨が捕れたのは。町の人たちばかりでなかつた、田舎から来る人がたくさん。鯨が捕れたら、すぐ評判してな。押し寄せてきよつた。沖で捌きよつとの横にいて、漕ぎ主の見とらん時、たしか1メートル角ぐらいに切りよつた。ピンタ張られたつちや、シッペたたかれたつちや。

〈 信仰 〉

信仰は深かつた。そりゃあになあ蟻の子ひとつもな。殺生ということは固く禁じて、生きたもんは採らん。この部落全部殺生できんかつた。昔の人の話は聞かれんばつてが。

『鹿苑日録』（京都・相国寺の日記）の1489年（延徳元）6月5日の項に、河原者又四郎の言葉が記されている。

「某、一心に屠家に生れしを悲しむ。故に物の命を誓いてこれを断たず。また、財宝を心してこれをむさぼらず」

又四郎とは、銀閣寺の庭園作りを祖父善阿弥とともに行ったとされる河原者である。時を越えて、中世以来の精神文化を見ることができる。

「人権のつどい」～田助・妙徳寺など～

田中良彦（作家・中学校教員）

平戸市田助に、妙徳寺という寺がある。

市街地からオランダ商館をさらに北上、平戸海上ホテルを右手に見て、供養川団地を抜け、大久保町沿いの道を鋭く右に折れて、幾つかの小さなカーブを下ると、風雅な木造家屋の並ぶ細い里道の脇に、この浄土真宗の寺はある。

周知のように田助という町は、昔日には海運の要衝として栄えた場所である。伝承されている田助ハイヤ節を聴けば、海を通った人やモノや情愛の世界が見えてくる。

*

北松地区（松浦市・平戸市・北松浦郡）では、当地の人権教育研究協議会の尽力で「人権のつどい」という事業が続けられてきた。社会啓発の一環として20年近く続いている。「届ける人権教育」として位置づけられたこの催しは、地区公民館や、福祉施設などで、人権講話や視聴覚教材を中心に人権学習の機会をつくってきた。それも休日や夜間といった地域住民が比較的集まりやすい時間帯に実施され、すでに150回を超えている。

*

特に、平戸で顕著なのは、この会の多くが、宗教施設で開催されていることだ。筆者が思い浮かべるだけでも、田助・妙徳寺、上中津良・浄隆寺、木ヶ津・風香寺、鏡川・光明寺、下中野・金剛寺喜寶院、津吉・延命寺、大久保・神崎カトリック教会光の園ホーム、カトリック宝亀教会、カトリック木ヶ津教会・・・等々がある。宗派もさまざま、どこも個性的な祈りの場である。

なかでも妙徳寺では、ひんぱんに「人権のつどい」が開かれてきた。ご衆徒の深いご理解もあって、ここでは、小学生や中学生や高校生たちの人権コンサートや意見発表、映画会などが開かれている。

若々しい吹奏楽やギターの音が響くなかで「人権」を考えるのである。

*

そのほか、浄隆寺では、「狂言」が舞われたし、ハイヤ節伝承館では、「浪曲」が語られた。田助公会堂では「落語」が披露されたことがある。かつて「河原もの」としてさげすまれてきた芸能がいかに人びとを励ましてきたかということが学びあわされて、そこには宗教が考えるべき差別解消のみちすじも示されてきたのである。長崎を中心としたキリシタン差別の歴史や、南九州でのかくれ念仏の故事をはじめ、数々の宗教弾圧の事実は、行き場のない人々の最後の抛り所を奪っていくという、自由や幸福を希求する民衆文化の歩みを止めることでもあった。（もちろん、過激なカルト教団への指導はここでは含まない）

*

平戸の寺院で「人権」が語られていることの意味を、もっと私たちは考えてよいだろう。そんなことを思いながら、それぞれの寺院を巡ってほしいのである。



左：光明寺での人権の集い



右：風香寺での人権の集い

参考文献

『紅毛文化と平戸 I』 (平戸市文化協会)

『被差別民の長崎・学』 (NPO法人長崎人権研究所)

ルイス・フロイス『日本史』 (東洋文庫)

『定本山頭火全集』 (春陽堂、全7巻)

『長崎県の戦争遺跡と戦没者慰霊碑』 (長崎県福祉保健
部原爆被爆者援護課)

『生月島のかくれキリシタン』

(平戸市生月町博物館・島の館)

その他

フィールドワークガイドブック

平戸・田平・生月れきし再見

2013年3月1日発行

NPO法人 長崎人権研究所

〒850-0048 長崎市上銭座町2番7号

TEL 095-(847)8690 Fax095-(847)8696

E-mail anan@sings.jp

<http://homepage3.nifty.com/naga-humanrights/>

デザイン・カット 西岡由香



平戸・田平・生月

フィールドワークガイドブック



NPO法人 長崎人権研究所